



憲法九条 加藤周一さんの 想い出と

九条の会・兵庫県医師の会
映画と講演のつどい

が、そこで講演したときにある先生から「安斎さんは日本に攻めて行く国があるとすれば、どうしたらお考えでしょか」と質問があった。質問者は、ロシアや中国、北朝鮮と言つてもらいたいそうな顔をしていたが、僕は直ちに「アメリカだ」と答えた。アメリカ以外にはあり得ない。ロシアはソ連から分解して、ロシア文学流に言えば「どん底」を体験して、とてもオホーツク海を超えて数十万人の軍勢を日本に派遣して、長期にわたって戦うなどの実力はない。北朝鮮はもつとない。韓国と台湾は日本の友好国となっているから、総理大臣が靖国に行つて刺激しない限り、攻めてくることなどあり得ない。中国は、政府高官にも聞いたが、中國にとって日本は巨大な市場であり、技術援助や経済援助をしてくれる極めて重要な国で、台湾を越えて日本に軍事力を行使などしたら、アメリカを含めて世界中を敵にして戦わないといけなくなるから、そんな非理性的なことをするわけがない。そういう形で順番に点検していくと、見当たらない。だから、防衛省や自衛隊の関係者に「どうが攻めてくるのか」と聞いて、「いつか、どうか」というだけで答えられない。それなのに、1年に5兆円も使っている不思議な国だ。

だいたい、日本と戦争をするのに北朝鮮は核兵器を開発する必要などない。日本海側に並んでいる原発を通常兵器で攻撃すれば、核兵器と同じような放射能の惨禍がある。だから、北朝鮮の核兵器はアメリカ向けなのだ。あまり慌てない方がいい。若者たちにきちんと伝えないと、北朝鮮が何かやるたびにこちらも身構えて核兵器くらい持つた方がいいと言つ出すので、気をつけなければいけない。

日本人は水戸黄門が好きで、1,000回を超えてテレビで放映されている。なぜ水戸黄門が好きなかと言えば、水戸黄門は絶対に死なないし、必ず勝つ。よく考えてみると、黄門は「先の副将軍」だから、前副総理・後藤田正晴のような人だ。それで、悪いことが起ると、黄門様のような政治家が出てきて助けてくれるはずだという信念が日本中にまん延している。これを「水戸黄門症候群」と言う。そういうものはいい加減にやめたらどうか。日本のテレビ時代劇では、「暴れん坊将軍」「水戸黄門」「大岡越前」「影の軍団」必殺仕事人も全部公権力が最後は助けてくれる。困っている市民が自らの主体的努力で問題を解決するのではなく、すべて公権力だ。そういうものに期待を寄せている場合ではないだら。

憲法第9条の重要性はピカイチだが、 憲法第12条の重要性も お忘れなきよう

憲法12条に「この憲法が国民に保障する自由及び権利は、国民の不断の努力によつて、これを保持しなければならない」と書いてある。国民の不斷の努力つまりたゆまない努力で「保持しなければならない」と書いている。これは道義的な義務として書いてあるので、そういう生き方をしない人は憲法違反の生き方をしていることになる(笑)。

「九条の会」はそれを厳正に実行しているだけの話で、恥ずかしがる必要はない。堂々と「私は憲法12条に書いてあることを実践しているにすぎない」と言えばいい。

私たち一人としては「微力」だが、決して「無力」な訳ではないと認識しよう。

われわれ一人ひとりができる」とは微力だが、決して無力ではない。無力はゼロだから、ゼロは1万を掛けてもゼロだ。1は1万倍すれば1万になる。われわれはいろんな力を持っている。選挙で投票するという力は、投票所に行って候補者の名前を書くことさえできれば国家権力のありますえも変えられる。だから、われわれは微力だが無力ではないということを再確認して、この國のありように微力を尽くしていきたいものだと思っている。

以上

加藤周一さんの
想い出と憲法九条

発行 兵庫県保険医協会
〒650-0024
神戸市中央区海岸通1-12-31
神戸フコク生命海岸ビル5F
電話 (078)393-11801
FAX (078)393-11802
発行日 2011年6月1日

九条の会・兵庫県医師の会 映画と講演のつどい

加藤周 さん



2010年12月12日に開催された、九条の会・安斎育郎講演会
「加藤周一さんの思い出と憲法九条」の要旨を掲載する。
(文責編集部)

憲法九条 想い出と

——30年来の不肖の弟子

本日上映の映画タイマーレンタル

著書全体を見て、「しかしそれだけではない」が何回出てくるか数えてみてほしい。話が興に乗つてくると「しかしそれだけではない」と言いまし
た新たな展開を見せるどんでもない人だった。
私と加藤さんが似ているのは、東大と東京医科
大学で働いていたことだ。加藤さんは東京大学医学部を出て戦争中に東大病院で働いていた。私は工学部を出てから、医学部の教官を十数年間やつ

管理学教室に出席として行って「いた」ともある。加藤さんは医学部を出て血液学を専門にしていたが、広島の惨状を見て「核兵器が使われた後に医師として何ができるかを考える」のではないか、「そもそも核兵器のようなものがなぜこの世に登場し、使われるようになるのか」その根本のところに自分は関わる必要があると、広い評論活動に身を置いた驚くべき人物だ。

私と加藤さんが初めて会ったのは1979年。そこで、加藤さんが還暦を迎えたかった。そのころ私は東京大学の医学部にいた。前年の1978年に国連で初めて軍縮特別総会という軍縮

問題だけを論議する特別総会が開かれた。これに日本からもNGOの代表502人を派遣した。私はNGOの役員をやっていたので国連にも一緒に行った。そこで、私はいろんな異分野の人々と核兵器をなくすにはどうすればいいかと考え、運動することに深く関わっていた。地域婦団体連合会(地婦連)や生活協同組合連合会、日本青年団協議会と一緒にやっている中で「忘れまいぞ核問題討論会」という企画を開催した。著名な講師を呼んできて、講演をしてもらひ参加者で討論をする。その講師の中に加藤周一さんがいた。

加藤さんの話を初めて聞いて、ただならぬ人物だとすぐに分かった。そのときの話の「核兵器はなくせます。なぜならば、それは必要だからです」という結論だけはよく覚えている。変なことを言う人だと最初は思った。必要なことでも実現しないことは、この世の中にはいっぱいある。戦争をなくすことは必要だけれども戦争は起こっています。にもかかわらず、「兵器はなくせます。なぜならば、それは必要だからです」というのが結論だった。後で考えてみると、これは加藤さん一流の表現だった。「なぜならば、それは必要だからです」と言ったのは、核兵器をなくすことが人類の生存にとって必要であることをまず認めることが要請しているのだ。そして、必要だと認識すれば、人間は知恵を集めて必ず実現できるという確信も込められているわけだ。だからわれわれは、「核兵器をなくす」とが人類の生存にとって必要なことをじつと人々の共通認識にすれば、必ず核兵器をなくせるのだといつ確信を広めるということが必要だ」という宿題を背負いながら、今日

おで反極運動をやめていた

私は東京大学工学部の原子力工学科の第1期生15人の1人だ。この国が原子力開発をやる上で高級技術者を養成する必要があるといつので、1962年に東京大学にわが国で最初の原子力工学科ができた。学生は15人で先生が40人いた。とてもサボりにくい学科だった(笑)。なぜ、原子力工学科に入つたか。

私が中学を卒業するとき親父は就職させるつもりでいたらしいが、兄貴が「今どき高校くらい出しておくものだ」と説得してくれて、両国高校に行つた。そして親父は3年になつたら就職されるつもりでいたのだが、また兄貴が出てきて「今どき大学くらい出しておくものだ」(笑)と言い、東京大学に入った。それで大学に行つて、最初の2年間は教養課程で理科1類だった。その後、理学部が工学部に進むのかを決めなければいけない。

エネルギー源のような形で平和的に使えるのかどうかは、放射能を安全に人間が管理できるかどうかにかかってくる。放射能を管理することができるかどうかを知るために、放射能や放射線が人間に作用したときにどんな影響があるかを調べることが必要だ。それを調べるには、広島・長崎は避けて通れない。勉強すると、核兵器が使われたら、自分が放射線防護学の専門家という顔をして出て行つても、何もできないことが分かった。だから、核兵器だけは使わせてはいけないと、核軍縮の問題に关心を染めていつて、そこから巡り巡つて平和学に入つていって、今日大学で平和学を教えてる。私のように工学部を出て、医学部に長年いて、経済学部で教えた上に、国際関係学部で平和学を教えているなんて人はめったにない。

高校時代に東京の代々木公園で開かれたアメリカ博覧会に行つた想い出が残つていた。そこで、驚くべきことに、アメリカが代々木公園に原子炉を設置して実験をしたのだ。今そんなことをやつたら袋だたきにあうだろうが、当時日本の原子力基本法は制定期というか黎明期にあつたので、可能だった。出力1ワットで豆電球ぐらいしかつかなかつたが、原子炉には違ひなかつた。分裂反応が起つて、放射線が出る。その実験を代々木公園で行つた。それを見に行つて、放射能って面白いなと思つてはいたが、大学2年になつて進路を決めるときに、東京大学に原子力工学科を作るということになつたので、第1期生として



か半定でき。」(ハシハシ)「正しかか?」あると
う。

3つの類型を語った加藤周二

飲み屋で話をして、「〇〇するのは正しいのでしょうか」という質問が出た。そうすると、加藤さんはまず、「あんた、正しいかどうか

（ついては「田舎」とか「里」のこという言葉を使
うべきではないとした上で、提起された問題を
うらみつぎの立場から見ているうえで論議す

の1から3のどの分類に属するかを明確にした上で答える。ぐうの音も出ない、そういう人だつた。

1995年「そろそろ出番である」という要請への加藤さんの答

存する。それは絶対的に正しいのではなく、事実との関係で正しいか正しくないかが判断されるような命題だと。

3つ目は、例えば「アメリカがイラクに軍を派遣したのは正しい」というのは、アメリカが正しいと主張しているだけの話で、アメリカがイラクに軍を派遣したのは正しくないと思っている人がいっぱいいる。だから、それは個人の希望や願望、価値観を述べただけで、人によって答えが変わつても構わない。価値観に依存する型の命題については、「正しい」とか「正しくない」という言葉を使つべきではないとした上で、提起された問題がその1から3のどの分類に属するかを明確にした上で答える。どうの音も出ない、そういう人だつた。

たまごと「論議語」という形で出てきて、たんたん憲法を変える方向について、つらに国民投票法の話まで出てきた。その辺り、少し危うさを感じたので、加藤周一さんに「そろそろ出番ですよ」と、憲法を守る運動の中に座つてもいいよとに手紙でお願いをした。それに対する加藤さんの答え

は、バイエルの94番まで弾く(笑)。彼は手品についても論じているが、僕のように手品をしない。僕は講義の中で加藤さんの科学的・合理的なものの見方・考え方を、ただ理論として述べるだけなくて、実際に手品をやって見せる。それは極めて説得力がある。目の前で「超能力のような現象が起こる」。しかも「起こした後で僕が今の現象をどうやってやったのか合理的な説明をする」。すると、「なるほど超能力だと思ったが、そうではない理由がある」と思う。しかし、「それだけではないのだ」ということもある。

そういう中で、加藤さんとの関係で想い出すことがある。それが幾つかある。

加藤周一さんを囲む会「白沙会」の成果 『居酒屋の加藤周一』

1988年に立命館大学に国際関係学部ができたときに、加藤さんは客員教授として来られ、以後10年間、立命館で教えていた。今日の映画の最後に、加藤さんが在籍した大学として立命館大学が出てきた。同僚になったから、講師控室でときどき顔を合わせていた。

そのうちに、加藤さんの70歳の誕生日(1989年)を京都の白沙山荘というところでやつて、その集まりを「白沙会」と名付けた。加藤さんが京都に来る日、晩飯を囲んでありとあらゆる質問を投げかけてみようといつものだ。その日は、料理屋に行つて、参加者がその日の新聞を持って来て、記事の中から、どういう問題を加藤さんに話してもいいたいか、食事をしながら議論する。すると、加藤さんは食事をしながら、聞いていて

「居酒屋の加藤周一」

「居酒屋の加藤周一」

1993年、学徒出陣50周年の年の
立命館での加藤さんの講演

テーマを選ぶ。そして、食事が終わってから加藤さんが一小時間、話をして参加者からありとあらゆる質問を浴びせかけられる。そして、二次会はだいたい、居酒屋に行つて、ビールを飲みながらざつくばらんな質疑応答をする。一銭も謝礼を払っていないくて、食事を食べさせるだけで、それだけの話ができるのだから贅沢きわまりない(笑)。そこでやっていた成果をまとめた『居酒屋の加藤周一』がかもがわ出版からでているので読んでほしい。

いたが、ミッドウェー海戦では、決定的に負け戦に転じ、航空母艦が6隻くらい撃沈させられた。そうした作戦で海軍の戦闘機を操縦していた若い兵隊がどんどん失われた。戦闘機の操縦は重い。運転より難しいから、パイロットが死んでしまうと、後をすぐに補充するといつわけにはいかない。それで、若くてそれなりに頭のいい大学生をパイロットに仕上げるのが一番いいといふことで、昭和18年についに大動員がかかった。そして特攻兵に仕立て上げられた。

それからちょうど50年目が1993年10月21日だった。その年の12月8日、太平洋戦争開戦記念日に加藤さんに講演してもらいたいと思つた。加藤さんはそのとき、立命館大学国際平和ミュージアムの館長だった。僕はそのとき館長代理だった。その館長の記念講演は、結局1993年12月9日に行つた。加藤さんはときどき皮肉やいろんな例え話を交えてるので、面白い講演だった。

戦時中、日本国民は「佐渡へ、佐渡へ」と草木もなびくように戦争政策に協力していく。それを、加藤さんは「佐渡へ、佐渡へと草木もなびくよう」を英語で表現して、さどイステイック・コンフォーミズムと言つた。彼が発明した言葉で、その場で思ついたのだろう。さどイステイックなどという英語はない。「佐渡へ、佐渡へ」という雰囲気を漂わせた英語的な加藤言語である。コンフォーミズムは、「佐渡へ、佐渡へと草木もなびくよう」の意味なので、自分の姿をみんなに合わせるとなる。だから、さどイステイック・コンフォーミズムは、「佐渡へ、佐渡へと草木もなびくよう」に自分で捨てて国家の戦争政策に合わせていつ

2004年、加藤周一さんが
とうとう「九条の会」結成に動い

2004年、加藤周一さんが
とうとう「九条の会」結成に動いた

